

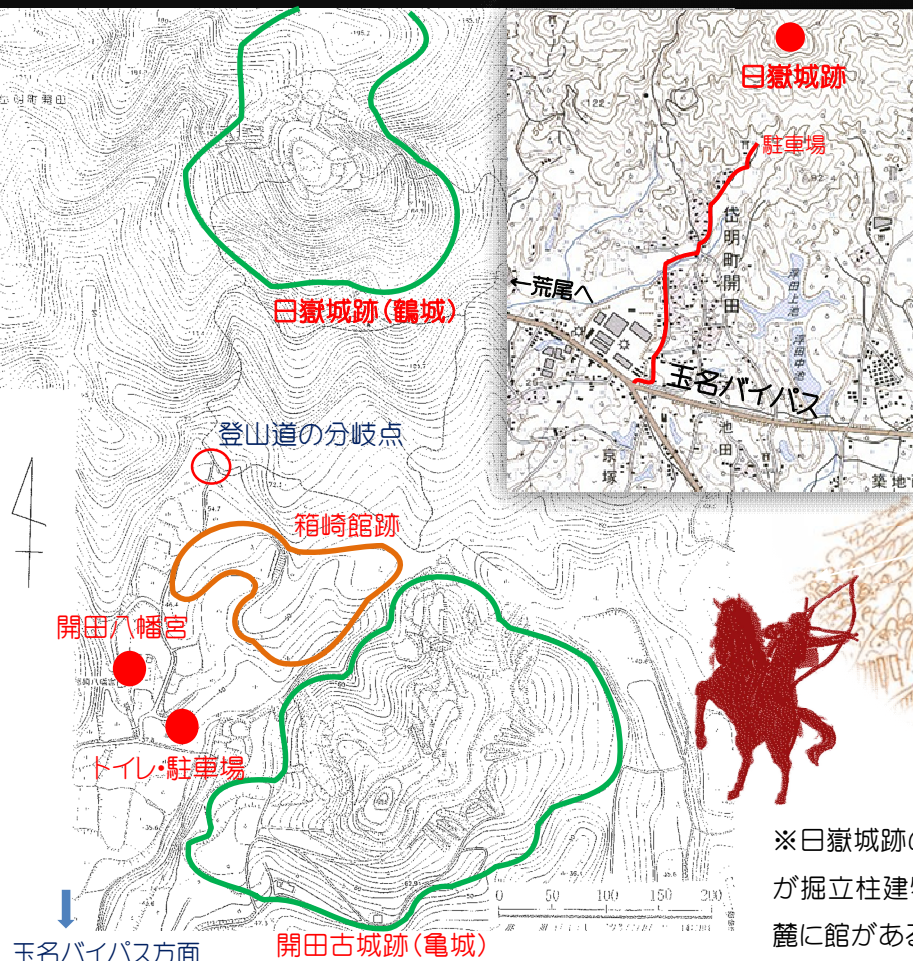
戦国時代に
実戦を経験した城！



小岱山の南麓（玉名市岱明町開田）に所在する中世の山城です。
標高約200mの日嶽山頂にあり、大野別符^{おののべつぷ}の地頭であった大野氏の山城と考えられています。小岱山（筒ヶ嶽^{つつがだけ}）は標高501mで、頂上には野原莊地頭・小代氏の筒ヶ嶽城がありました。大野氏とこの小代氏は対立関係にあって、1582（天正10）年頃に領地争いが発生し、合戦（金山・焼原の戦い）へと発展。大野弾正少弐親祐^{だんしょうしょうひつ}が龍造寺氏と組んだ小代親忠^{ちかつく}（親伝）と戦い敗北します。そして日嶽城は落城し、大野氏は没落、家系断絶といった悲劇の舞台にもなりました。現在は、開田八幡宮と「ホタルの里」付近にトイレと駐車場があり、二つのルートの遊歩道が整備され、多くの登山者がいます。頂上からは雲仙や有明海が見える景色が楽しめます。

大野氏の山城

～有明海と大野別符領を見渡す城～



現在、小岱山県立自然公園の一部となっています。



頂上の主郭



日嶽城跡の想像図

箱崎館跡

※日嶽城跡の麓には「箱崎館跡」とされる平場があり、未調査ですが掘立柱建物や馬小屋などがあったと考えられます。このような麓に館があるタイプは「根小屋式山城」と呼ばれます。

日嶽城は、別名「開田城」ともいわれ、約600m南に位置する開田古城と共に「鶴城」・「亀城」とも称されています。また、日嶽はかつて「火嶽」と書き、狼煙^{のろし}をあげる山（狼煙台）で、有明海に入る船を見張って和水町の飛尾大明神社へ（その後、鞠智城まで）伝えていたといわれています。大野氏は大野別符（高瀬・築地・岱明町一帯などを含めた領地）を管轄^{かんかつ}しており、一族がそれぞれ領内に10か所以上の居館（城館）を構えていました。これまで日嶽城跡の発掘調査は実施されていませんが、平成6年に旧岱明町の文化財保護委員会による踏査が実施され、縄張り^{なやばり}図が作成されたことにより、その実態が明らかとなりました。また、この踏査時に山頂の巨石群から土器片も採集されています。近年では鶴嶋俊彦氏（城郭専門）の調査によって、改めて主郭・腰曲輪^{しゅかく}・虎口^{こしるわ}・堀切^{こべち}の存在が認められると共に「熊本県内では事例が少ない畝状^{うねじょう}豎堀^{たてぼり}を有する本格的な山城」であったことなどが指摘されています。

日嶽城跡の構造をみる

～畝状堅堀をもつ縄張り～

日嶽の頂上には花崗岩の山塊が露呈していますが、ここが主郭にあたります。北西ー南東を主軸とした長さ 47m、幅 35mの楕円形の主郭ですが、巨石群（直径約 24m）の存在によって約 1/3 は曲輪として使えなかったと考えられます。しかし、周囲は急傾斜で登城は容易ではなく、この独立した山城は大野別符領域のどこからも見上げることができました。主郭への出入口は東西 2 か所あって、現在の登山道と重なりますが、この両側に平入りの虎口とみられる痕跡があります。そして、東側に 3 段の腰曲輪、西側にも 3～4 段の腰曲輪があり、西側には畝状堅堀が 4 条みられます。また、北側は尾根を断ち切って堀切とし、そこにも一つの曲輪がありました。このように、まだ石垣はない城でしたが急斜面を生かした縄張りは、小規模ながら当時の中世山城を凝縮したような構造となっていたのです。



ここで弁当食べると
城主気分!?

分岐点から

「西廻り登山道」が 550m

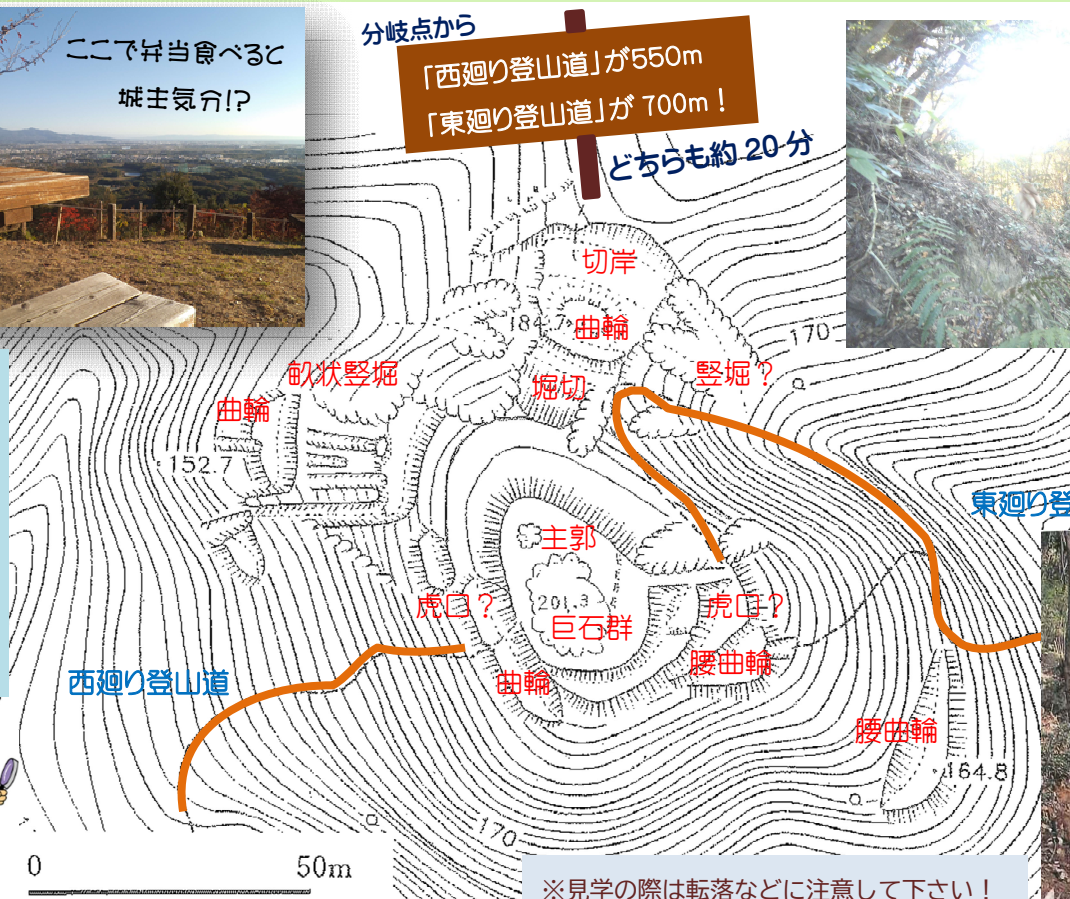
「東廻り登山道」が 700m!

どちらも約 20 分

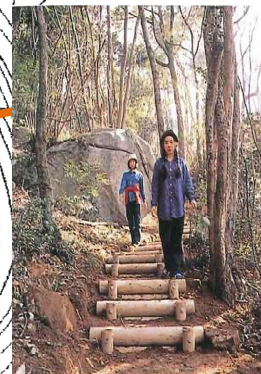


北側の堀切

“畝状堅堀”がある山城は県内でも数例なんじゃ！筒ヶ岳城がある北西側の守りを意識した縄張りと考えられるぞ！



東廻り登山道



遊歩道

※見学の際は転落などに注意して下さい！

日嶽城跡の縄張図(鶴嶋 2022 から引用加筆)

大野一族を見守った

氏神さま

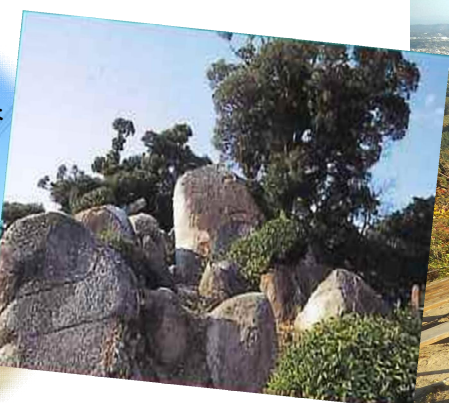
神社に祀られていた、お面は
県内最古(鎌倉時代の作風)
で14世紀頃のものと。市指定。



開田宮崎八幡宮と背後の日嶽城跡

主郭にある花崗岩巨石群

(まるで天然の檜台！)



主郭からの眺め(高瀬・築地方面を望む)

畝状堅堀とは通常の堅堀とは異なり、畝状に連続させたもので、登ってきた敵を集中して攻撃できる構造です。九州においては、福岡県を中心に中世山城の築城技術として発達したといわれ、豊前・筑前東部・筑前北部に集中しています。県内では、**玉名郡に 4 か所**と肥後南部(八代・芦北・天草・球磨)でしか確認されていません。玉名郡では、荒尾・玉名の**筒ヶ岳城跡**、南関の**大津山城**、和水町の**和仁城**と**坂本城**のみとなっており、1550 年(天文 19) 年以降、大友氏の影響で畝状堅堀が採用されたのではないかと考えられています(鶴嶋 2022)。